Shiga Green Purchasing Network
滋賀グリーン購入ネットワークニュース

滋賀GPN News

特別号

滋賀グリーン購入ネットワーク「5周年記念フォーラム」開催 報告書

●開催日：2004年11月19日（金）
●会　場：ビアンカ船上
　　※大津港（大津市浜大津）より出港
●参加者：160名
●主　催：滋賀グリーン購入ネットワーク

▲「5周年記念フォーラム」が開催された浜大津港定着の客船

今年が設立5周年にあたる滋賀GPN。これを機に、県民の環境保全行動の結果を映す鏡である“琵琶湖”の環境問題について会員が共に考える場を提供しようと、「5周年記念フォーラム」を開催しました。昨年の11月19日（金）、場所は琵琶湖に浮かぶ客船「ビアンカ」船上で繰り広げられた「5周年記念フォーラム」の内容を、報告書としてご紹介します。

【出港式】13：00～<●開会挨拶●知事祝辞●GPN祝辞>

▲5周年記念のこの日は、これからの5年10年のグリーン購入の大きな波を起こす旅立ちへの出航日として、世界の常識を変え、自然と人間がともに輝くような生活モデル、産業モデル、社会のルールモデルを滋賀県民でつくっていこうと挨拶された國松知事。

あいにくの曇り空でしたが、午前中まで降っていた雨も出港式には上がり、160名の多くの会員の皆さまに参加頂きました。浜大津港内で行われた出港式において、代表幹事の挨拶で始まり、知事を始め来賓による滋賀GPN5周年を祝う熱いメッセージが述べられました。その後、一同乗船へと向かい、「5周年記念フォーラム」が船内で開催されました。

船内のメイン会場では、琵琶湖で漁業を営む戸田直弘氏を皮切りに、北川憲司氏（県社会福祉協議会 事務局次長）、一瀬諭氏（県立衛生環境センター 専門員）、海東英和氏（当時新旭町長）、森建司氏（新江州(株)会長・循環型社会システム研究所 代表）とリレートークが続きました。地域の環境問題を解決するために私たちが組織として、また個人として今何ができるのか、深く考えさせられるとともに今後の活動への指標ともなる内容でした。

講演の合間のフリータイムでは、船内に設けた展示会場や体験会場にて、実行委員会メンバーが準備した各コーナーを参加者にまわっていただきました。

終わりには幹事会より「未来への提言」を発表し、「仕事として取り組むグリーン購入」だけに留まらず、個人として取り組む「グリーン購入」から「グリーンな暮らし」を始めることの大切さについて、参加者が思いを共有したフォーラムとなりました。

▲グリーン購入ネットワーク代表理事の一人である枚本育夫さんの祝辞風景

代表幹事挨拶

滋賀GPNの集まりは、5年前の12月に発足致しました。その頃は、これだけ大きな集まりになるとは思っておらず、それほど見通しがはっきりしていたわけでもありません。とにかく始めないといけない。少しでも広げないといけない。そういう意気込みで、できるだけ楽しい、構えない集まりにして、少しずつ輪を広げて参りました。おかげさまで、現在の会員数は391団体となり、この数は地域的な密度で見れば、世界一ではないかと自負しております。

私たちは、環境を守るとか環境を保護するとか言いますが、それはずいぶん過ぎた言葉ではないかと思います。みなさんはいかがでしょうか。私が今勉強しております環境倫理学という分野は、特に生命倫理学の分野と接近しております。いうならば、どういう環境を守るかということは、どういう生き方をするかにつながりがあるということです。

環境を守る、湖を守るということの原点は何だろうか。この湖と、山と、その中で私たちは生かせて頂いているんです。それをもう一度再確認するために、ビアンカでの船上フォーラムを設定しました。水鳥の鳴き声や、周囲の山、湖を体に感じながら、今一度、私たちが本当に守ろうとしているのは何なのか。その原点に振り返ってください。

PROFILE

滋賀GPN代表幹事
土屋正春
滋賀県立大学 環境科学部 学部長・教授
環境計画学科。
研究分野は環境法、地域環境政策。

session 1 琵琶湖の現状を知ろう！　13：35～　●講演／戸田直弘氏

「わたし琵琶湖の漁師です」演題と同名の本を出版され、話題を呼んだ青年漁師、戸田さんの琵琶湖と向き合って暮らしてきた現場からの生の声。

琵琶湖の水を頼りに生き続けている魚に私たちは“生かされてきた”。マザーレイクと呼ぶに相応しい湖、そこが自分たち漁師の職場であり誇りに思っていたが、最近、何かおかしいと感じるようになったと話を切り出す。

「わたし琵琶湖の漁師です」

琵琶湖で問題になっているのは外来魚だけではない。野鳥のカワウも、琵琶湖に1万5,000羽から2万羽いると推測され、1日に30トンもの魚を捕っている。そのカワウは人の手を伝って来たわけではないが、ブラックバス、ブルーギルなどは、本来、琵琶湖にいるはずはなく、明らかに人の手によって運ばれてきた魚である。「琵琶湖を守るなら漁師を守れ」と言ってくださっている先生がいるように、琵琶湖の本来のあるべき姿が守られることで、私たち漁師が生活していけることにもなる。みなさんにも財産として在来魚を残していく義務があるのではないか。そうすると1匹、10匹でも外来魚を取り出すというのが、滋賀県の、また国民のルールだと話す。

またその一方で、琵琶湖はブラックバスとブルーギルに乗っ取られていると言っても、琵琶湖の懐の深さはすごい。それは、機会は悪かったが、昨年のコイヘルペス騒動の時に、その死骸の量を見て感じたと言う。また、守山の下之郷遺跡、古高遺跡からゲンゴロウブナの骨とひとつになって熱帯ジャポニカ米が出てきたことから推測すると、1800年も1900年も前からふな寿司があったということ。昔から続いてきた琵琶湖の本来の幸をいただくということは、琵琶湖が健康であるという前提だが、将来に渡って継続していくべきことではないか。だから、琵琶湖が育んだ魚介類を購入しておいしく食べていただくことも、ＧＰＮの考えに沿った生活ではないかと語った。

●プロフィール
漁師 戸田直弘氏
守山市生まれ。20歳から、祖父、父を継いで琵琶湖の漁師となる。滋賀県漁業組合青年会会長任務（1999～2003）。移入魚問題、琵琶湖の環境問題など、積極的に発言し、社会環境学習の場として「水辺を紹介すること（漁場体験等）」にも力を注ぐ。

session 2 グリーン購入の歴史を知ろう！　14：15～　●講演／北川憲司氏

今では法律までできたグリーン購入の発端は滋賀県の取り組みからであった。10年前、県出納局在籍時にグリーン購入を発案した北川さんの現在の思いとは…。

中学校に入ったぐらいの頃、近江八幡の牧水泳場で泳いでいて、立ったら指の間からヘドロがぐにゅっと入った。その時に、琵琶湖が汚れたということを身体で実感した。その経験が環境問題に関心を持ったきっかけだと話を切り出す。

「びわ湖発グリーン購入 ～環境問題を人口で考える～」

環境問題から障害者問題と県職員であると同時にいろんな市民運動に関わってきた北川さんにとって、グリーン購入は北川さんの環境の関わり方の一部分である。だから、グリーン購入だけを特化して考えるのではなく、循環システムを回していく中で、グリーン購入はインセンティブをつける部分、入り口部分だと話す。東大教授の山本良一先生によると、環境問題は循環システムの破たんによるものだという。だから、循環の仕組みというものを安定的に回すことなく物事は永続しない。そういうものの考え方の中で、グリーン購入も発展しないといけないのだと、北川さんは語る。

10年経っての感想は、環境サイドの問題を考えるときに、グリーン購入は必ず問題意識として成立させておくことが大事であると言う。60年後の日本の人口を見据えると、現在の人口から7～8千万人減少した第二次世界大戦後の人口になるということ。それだけではなく、高齢者が多くなって子どもが減り、就労人口が少なくなるということ。つまり、産業構造を支える人間が減るということ。いうならば、企業活動、経済活動をやっていく中で人材をどう確保していくかという問題が出てくる。外国人の就労、60歳からの働き口をどうするか、専業主婦制の撤廃という3つが、間違いなく出てくる。福祉関係と環境を、グリーン購入も含めてクロスオーバーした新たなビジネスチャンスを考えていく必要があると話した。

●プロフィール
県社会福祉協議会　事務局次長
北川憲司氏
八日市生まれ。民間企業経験後、滋賀県職員となる。10年前、出納局在籍時に「グリーン購入運動」を発案し、その仕組みは「グリーン購入法」にも結実。現在は、介護保険からはじまる地域ケア、安心できる暮らしづくりを、市民、市町村、事業者と連携し推し進めている。

session 3 琵琶湖を体感しよう！　14：35～

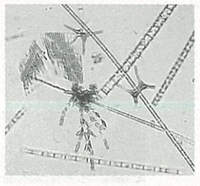
フリータイムのナビゲーター紹介から始まり、琵琶湖のプランクトンを27年間観察し続けてこられた一瀬さんが、プランクトンの種類や生態の変化から、見えてきたことについてプロジェクターを使って詳しく説明され、その後、ビアンカ船内2階の「びわ湖体験会場」と4階「展示会場」をじっくり見学コースとなりました。

▲フリータイムのナビゲーターの皆さん

プランクトンから見えてくる水環境

県立衛生環境センター
専門員　一瀬 諭さん

富栄養化防止条例が制定され、減少傾向にあったプランクトン総量が、その後、横ばいになり、1995年以降は徐々に増加傾向になっているそうです。中でも、アオコの原因となる藍藻類や鞭毛藻類が大量発生するとともに、琵琶湖の北の深層部でも低酸素化が進み、微生物由来の微粒子が確認されるなど、沿岸部から湖底部へ広がる水質汚染の深刻化が報告されました。



◀1990年以降、プランクトンの種類に明らかに変化が見られるという。

フリータイム！ 14：50～

ビアンカ号が、目で見て、手で触って、体感できる湖上環境学習船に。

船内の展示会場では、湖国の動植物や環境に関するパネル、琵琶湖固有種の生きたホンモロコやヨシノボリの展示などを行い、湖魚料理の試食コーナーやプランクトンの観察コーナーも設けました。

また、参加記念に滋賀ＧＰＮシンボルマークの間伐材製コースターへの焼印、参加者による滋賀ＧＰＮ看板協同製作、ニゴロブナの記念放流なども実施しました。デッキに出て湖上の風を体感しながら、いつもとは違う角度から郷土を見つめなおし、新たな発見ができたのではないでしょうか。

琵琶湖汽船ビアンカ号
琵琶湖の環境を考える
みんなの思いを乗せて出航！

▲司会としてフォーラムを盛り上げてくださった常任幹事の藤井洵子さん。（環境生協）

【4F：展示会場】

記念コースター作成

▲信楽町森林組合協力で、間伐材製コースターに「5周年記念」を自分で焼印するコーナーは大盛況でした。

琵琶湖に贈るメッセージ

▲琵琶湖への想いを一人ひとりがヨシ紙に書いて、ボードに貼り付けました。みんなの夢を実現させていきましょう！

「自己診断システム」体験コーナー

▲あなたのオフィスのグリーン度は？パソコンによるチェックシート式で、我が社のグリーン度を採点しました。

琵琶湖のヨシ

▲琵琶湖の水を浄化し、様々な生物の命を育むヨシ原について、ヨシの大切さが分かりやすく紹介されました。

グリーン購入コーナー

▲グリーン購入の基本原則についてのパネル展示と、さまざまなグリーン文具が紹介されました。

▲琵琶湖を見つめながら談笑する参加者。

琵琶湖のコハクチョウ

▲「コハクチョウを愛する会」の写真パネル展示で、草津の湖岸に飛来するコハクチョウが紹介されました。

湖魚をちょっと試食！

▲漁師の戸田さんが朝一番に炊いてきてくださった、琵琶湖の恵み「湖魚の炊いたん」は本当に美味しかったです。

ニゴロブナ記念放流

▲県水産振興協会の提供で、貴重な琵琶湖の固有種のひとつである、約200匹のニゴロブナを折りを込めて放流しました。

【2F：びわ湖体験会場】

「記念看板」共同製作

▲フォーラムに参加した記念に、一つひとつの木片に思いを込めて、間伐材の「滋賀ＧＰＮ看板」を共同で作りました。

プランクトン観察

▲（株）コーガクの協力により最新式の生物顕微鏡で琵琶湖のプランクトンを観察。プランクトンの専門家、一瀬さんにご指導いただきました。

session 4　明日の滋賀GPNを描こう！

16:15～ ●講演／海東英和氏

資源循環型の地域づくりに取り組まれてきた海東さんが、その思いを語る

循環型まちづくりとグリーン購入

「グリーン購入ではいつも物品購入の話ばかりになります。そこで今日は現場や学校など、いろいろなところで実行するのが大事だということをお話したいと思います」と海東さんは写真を見せながら新旭町の取り組みについて話し始めた。

役場は今までお金をかけて環境を破壊してきたので見直すことが多い、と海東さんは言う。その一つとして、山に人の手が入る仕組みを再生する取り組みを始めた。拠点施設は国産の木材を使い、暖房にも薪ストーブを使用している。

町政要覧づくりは「売れるもの、町民に元気が伝わるものを作ろう」というのがコンセプト。写真家の今森光彦さんを起用し、従来にない町政要覧ができあがった。誌面で取り上げられた「かばた」のある暮らしはＮＨＫ『命めぐる水辺』で取り上げられたことで、地元でも見直されてきた。今は「かばた」を守る動きも出てきているという。

町営住宅の建設にもグリーン購入の発想で取り組み、地元の材、地元の技、地元の匠が発揮できるプロジェクトに変更。「こんなに喜ばれる公共事業は初めてでした」と笑顔を見せた。来年春には木質バイオマスによる地域熱供給が稼働するほか、地場産業である綿織物の原料、綿栽培の復興に取り組む様子も紹介された。このような地元の材に目を向ける活動が、町に対する情熱を復活させているようだ。

●プロフィール

新旭町長(当時)　**海東英和氏**

1960年、新旭町針江生まれ。龍谷大を卒業後、新旭町職員、町議員などを経て、1999年から2004年12月末まで新旭町長。
「ないものねだりではなく、あるものさがし」をモットーに、地域の元気を創り出す活動を展開している。

16:45～ ●講演／森　建司氏

環境をキーワードに様々な活動をされている森さんが、活動を通してグリーン購入の将来像を語る

グリーン購入から見えてくる未来

社長職を退き、今は循環型社会システム研究所の仕事に没頭しているという森さん。包装材料を扱う新江州株式会社で社長を務めた経験から「今、自己矛盾が一番の問題になっている時代だと思うんですね」と話を切りだした。

包装材料を扱う新江州では、いかに包装材料を減らすかということが社会貢献になるのだが、それは反面、自社の売上を減らすことになっているという自己矛盾にも繋がっているのだと話す。このような背景の中でエコ容器包装協会を設立し5年経つが、やはりゴミは減らないのが現状で、特に一般家庭に入る商業包装は、消費者の生活習慣を改めないとこの現状から変わることはない。そうした考えからエコ村運動が始まった。また同時に、実際はエコの理念では商売できないという矛盾を抱えた大工さんの棟梁や、工務店の社長さんが集まり、「我々は商品を作るんじゃない、作品を作って後世に残そう」という循環思想を打ち出して、湖国エコ村デザイン協会がびわ町にできた。さらに現在は「ＭＯＨ（モー）の会」としてバイオマスをやり始めている。「循環型社会が途絶える時は人間の種が絶滅する時だ」という考えから循環型社会に変える運動を始めた森さん。自己矛盾を認識することで、こうした様々な環境に関わるＮＰＯ活動を通して、個人も含め周りの人々も考え方が少しずつ変換していくことが大事であり、そうすれば暮らしも変わってくるのだと語った。

●プロフィール

新江州株式会社　代表取締役会長
循環型社会システム研究所　代表
森　建司氏

1936年生まれ。県立長浜北高校卒業後、江州紙業に入社。1987年に代表取締役社長就任。1992年に社名を新江州（株）に変更。2003年より代表取締役会長。業務のかたわら、バイオビジネス創出研究会理事長、エコ村ネットワーキング副会長など環境に関する幅広い活動を展開している。

【閉会式】17：15～＜●閉会挨拶＞

閉会式では滋賀グリーン購入ネットワーク常任幹事の三好君雄さん（NEC関西）が、滋賀GPNの今後の活動の道標となる「未来への提言」を発表して閉幕となりました。

※「未来への提言」内容は「GPN5周年記念誌」の20頁21頁に掲載されています。

帰りにはフリータイムで共同製作した「記念看板」の完成品（間伐材の木片をはめ込んで作ったもの）がビアンカ入場口のエントランスホールにて披露されました。参加者全員の結束により出来上がった「記念看板」は、グリーン購入における人と人とのつながりと、その広がりを強く意識し、新たな目標に向かっての更なるスタートを切るためにも、滋賀GPNの象徴として素晴らしい記念看板となりました。